

論文

最古層經典における sata、sati の用法

並 川 孝 儀

〔抄 録〕

仏教最古の經典『スッタニパータ』の第四章「アッタカ・ヴァッガ」と第五章「パーラーヤナ・ヴァッガ」に説かれる教えの中、苦しみを脱するために修行を重ね寂靜なる悟りへの境地をめざす修行過程を取り上げ、詳細に分析して考察する。中でも特筆すべき点は、悟りへの道程を説く用例の多くが sata や sati（「念」）を修行の中核と位置づけていることである。それらの用例が当時の修行に関する根本的立場を示したものならば、その説示こそ仏教の修行法の源流と位置づけられる。本論では、まず sata や sati の語義を、続いて修行過程に関する用例を探り、そこから修行上の用法を考察する。さらに、sata や sati と、それ以外の精神的修行とを比較し、最古の仏教における精神的修行の様態を明らかにする。

キーワード 『スッタニパータ』、「アッタカ・ヴァッガ」、「パーラーヤナ・ヴァッガ」、sata（sati）の原義と用法、仏教最古の修行法

はじめに

原始仏教は仏教興起時代から次第に展開と変容を遂げているにもかかわらず、これまでゴータマ・ブッダの仏教であると画一的に理解する傾向にあった。その意味で、ゴータマ・ブッダの仏教とそれ以降の展開を意識しつつ徹底して研究されてきたかどうかは残念ながら疑わしいといわざるを得ない。ある部分では展開に基づき研究されても、ある部分においては成立過程が十分に検証されることなく展開した結果をあたかも最初から存在したかのように都合よく理解されている場合がある。こうした現状をみれば、たとえ一部に問題点を残すことがあっても、展開と変容を可能な限り一貫した方法に基づき考察し、まずはそれによって導かれた結果を明らかにすることが原始仏教の解明につながるものと確信する。

本稿では、仏教が誕生した当時の事情を伝えるといわれる『スッタニパータ』の第四章「アッタカ・ヴァッガ」と第五章「パーラーヤナ・ヴァッガ」（序と結語を除く）においてゴータマ・ブッダ（世尊）の説示とされる教えを徹底的に分析して、そこから得られた仏教最古の教

えが実際はどのようなものであったかを明らかにしたい。中でも、苦しみを脱して寂靜なる悟りへの境地をめざす仏教の根本ともいえるテーマを説き明かす第五章を中心にして、この根本的なテーマが興起時代ではどのように説示されていたのかを考察する。第五章に説かれる悟りへの道程は当然のこと原初的な内容であり、そこにはいまだ修行法として確立しているような説示はみられないが、むしろそうした簡潔な修行の説示であればこそ要点は顕わとなり、当時の根本的立場を読み取ることができよう。

その要点は、√smṛ「記憶する、心にとどめる」という語根の過去受動分詞である sata と、名詞である sati が悟りへの道程において修行の第一歩として、また修行の根幹として説かれていることであり、これが当時の根本的立場の一端を示しているのではないかと考えられるのである。というのも、悟りへの道程を説く一八の用例中の一四例までが sata や sati を修行の中核と位置づけるという極めて特筆すべき用法によって説かれているからである。これらの用例が仏教の興起時代における修行の根本的立場を端的に示しているものとするならば、その内容こそが仏教の修行法の源流であるといわなければならない。したがって、まずは sata や sati がどのような用法をもって説かれているのかを考察することは最古の仏教の修行法を解明することにもなり、そして仏教が興起した当初はどのような立場で修行を行っていたのかを明らかにすることにもなる⁽¹⁾。

第一節 最古層經典にみる sata、sati

最古層經典には sata は二一例説かれているが、そのうち第四章（766-975偈）に六例、第五章（1032-1123偈）に一五例が、sati（satimant を含む）は第四章に三例と第五章に四例の計七例がみられる⁽²⁾。古層經典の第一章～第三章（1-765偈）になると、sata（patissata を含む）の用例は六例で、sati（satimant を含む）は一三例みられる⁽³⁾。この状況からみて、sata は最古層經典にみられる特徴的な用例であるといつてよく、それだけにそこには最古層經典固有の立場が示されていると考えられる。

第一項 sata、sati の先学の訳語

まずこの語義を考察するが、その前に従来まで sata や sati がどのように解釈されてきたのかを先学の諸訳から眺めてみる⁽⁴⁾。その代表的な数例を以下に挙げてみる。

sata について、中村訳は「よく気をつけていて」（855、1039）や「気をつけて」（933）、宮坂訳は「正しい想念があり」（855、933）や「正しく」（1039）、荒牧訳は「あるがままにいまこの存在を自覚しつづけている」（855、1039）や「あるがままにいまこの存在を思惟しつづけて」（933）、村上・及川訳は「思念をたもち」（855）や「心して」（933、1039）、田中訳は「気をつけて」（855、933、1039）、ノーマン訳は「mindful」（855、933、1039、1087）、石飛訳は「気づき」（855、933）などの訳がみられる。

sati について1035偈の例を取り上げると、中村訳は「気をつけること」、宮坂訳は「正しい想念」、荒牧訳は「あるがままにいまこの存在を自覚すること」、村上・及川訳は「思念」、田中訳は「念」、ノーマン訳は「mindfulness」などと訳している⁽⁵⁾。

以上から、中村訳はほぼ共通して「気をつけて」、宮坂訳は「正しい想念」や「正しく」と、荒牧訳は「あるがままにいまこの存在を自覚すること」と訳しており、村上・及川共訳は「思念」や「心して」、田中訳は sata については「気をつけて」、sati については「念」と訳し分けていることがわかる。これらを総じてみると、中村訳、宮坂訳、村上・及川訳、田中訳、ノーマン訳、石飛訳などの「気をつけること」、「正しい想念をもって」、「思念（心して）」、「念（気をつけること）」という訳と、荒牧訳の「あるがままにいまこの存在を自覚すること」という訳に大きく分かれている⁽⁶⁾。前者の訳は、一見するとわかり易い訳のようでもあるが、漠然としていてもうひとつ明瞭でない。「何に対して」気をつけているのか、「何を」思念しているのかということが解釈されていないことは何よりも問題である。これが苦しみを超えるための一つの修行法とするならば、その解釈ではどう位置づけられる修行法なのかもはっきりしない。田中教照が「念が修行の中心におかれており、欲望を回避する方法として、念のもつ意義が重視されているといえよう」と指摘しているように、その意義の重要性が大きいのであれば、なおさらどのような意義を有する修行であるのかを明らかにしなければならない。これは最古の仏教でとりわけ修行において最重要と考えられる用語であるだけに、そしておそらくそこには他にはない仏教だけが明示した根本的な立場が含まれていたはずであるだけに、その意義を考察することは強く要請される。その点では、荒牧訳だけが「あるがままに」と様態を、そして「いまこの存在を」と対象を明確にし、修行上の意義を有する用語として解釈されている。

第二項 sata、sati の語義

上記の諸訳はいずれもどのような根拠によったのかが示されていないようである。そこで、まずは sata や sati の語根を通して、その原意を考察する。この語の語根は $\sqrt{\text{smṛ}}$ であり、sata は過去受動分詞形であり、sati は名詞形である。 $\sqrt{\text{smṛ}}$ は「記憶する、心にとどめる、思い出す」という意味であるから、一般に sata は「記憶された、心にとどめられた、思い出された」、sati は「記憶、心にとどめること、思い出」とされる。

では、この原意についていくつかの用例を挙げて考えてみる。古くは『スッタニパータ』第四章「アッタカ・ヴァッガ」に

「賢者たるもの、五つの恐怖を恐れてはならない。〔即ち〕仏教修行者は sata していて、辺地で修行をしている時は、虵、蛾、蛇、人間との接触、四足〔の獣を恐れてはならない〕」(964)

と、辺地で遭遇する蛇などの危難に気をつけるようにと説かれているが、ここには特定の恐怖

の対象だけを注意せよといっているのではなく、仏教修行者たるものは辺地で修行をしている自己の置かれている状況をしっかりと自覚さえしていれば、どのようなものに遭遇しようとも恐れることはないと教えているようである。そう理解すれば、sata は自己がいま、どこで、どのように存在しているのかを正しく自覚するという仏教修行者のもっとも基本的なあるべき姿勢を示している用語といえよう。

また後の韻文經典ではあるが、興味深い用例がみられるので以下に示す。

「私が病にかかった時、私には sati が生じた。『私は病にかかっている。〔しかし、今はなすべき修行の〕つとめを忘れてよい時ではない』と」(Th.30)

「〔この世において〕生じて形をなすものは、実質がなく、つくられたもので、乱れて秩序なく、絶えず揺れ動くものであると、よく知られている。そのことが自分にも起こっていると知って、私は satimant して、寂靜に達した」(Th.260)

「誹られようと尊敬されようと、安樂であろうと苦しみであろうと、私には sati が起こっている。つくり出されたものは不浄であると知って、いかなるものにも〔私の〕心は汚されない」(Thi.388)

などの用例⁽⁷⁾がみられるが、前者は病にかかっているようとも修行者であることをしっかりと自覚することで修行者としての自己を再確認したことを告白した偈となっており、次はこの世に存在するさまざまな事物は儚いものであるが、実は自分もそうした状態であることをよく知って、その自己の存在をあるがままに正しく自覚することによって寂靜に達したと説いた偈である。後者の偈は、いかなる状況にあらうとも自分には自己を正しく見つめる姿勢が確立しているということを説いている。これらの用例から、sati は「今どのような状況に置かれているのか、その自己の存在をあるがままに正しく自覚すること」という意味で説かれているといえよう。単に自己以外の何かに気づくことでも、想うことでもない。これらの用例は、日々の厳しい修行生活に身を置く仏教修行者の基本的な在り方を説いたものであり、sata や sati の原意を知る上で重要である。

こうした原意に基づいて、最古層經典にみられる sata の用法を第五章の一例を挙げて考えてみたい。メッタゲーという名の若きバラモンがどうすればこの世の激流や、生まれと老い、憂いと悲しみを乗り越えられるのかという問いに、世尊は次のように答える。

「メッタゲーよ、伝承によるものではなく、存在するものを目の当たりにできる〔この世において、激流、生まれと老い、憂いと悲しみを乗り越える〕教えをあなたに説き明かそう。その教えを知って、sata していて、修行し続けていれば、この世〔に存在するもの〕への執着を乗り越えられよう」(1053、cf.1066)

この偈の文脈上のポイントは、まず「世尊の教えをよく知って」、「自らが sata していて」、「修行していれば」、「この世に存在するものに対する執着を乗り越えられる」との四点であろう。これから判断すると、仏教修行者にとって sata は世尊の教えをよく知った上で、何より

も最初に自らが行うべき宗教上の行為であると同時に、一方で日々のあらゆる修行の基礎となる行為であることを意味するものと考えられる。つまり、sata は修行の根幹を示す用語ではないかと理解できる。

こうした用例を踏まえ、sata や sati の意味を考えてみる。上記の用例から最古層經典で用いられている sata や sati は、語根 $\sqrt{\text{smṛ}}$ を「記憶する」でも「思い出す」でもなく、「心にとどめる」という意味で理解するのがもっとも適切ではないかと考えられる。他動詞である $\sqrt{\text{smṛ}}$ から過去受動分詞が作られる場合、その意味は受動であり、動作の完了、またはその結果として生じた状態を示すものである。sata は「心にとどめられた」とするか、「心にとどめられている」といった意味になり、sati も「心にとどめられていること」と考えてよいであろう。

そうであるならば、では何が心にとどめられているのか、それが問題となる。上述したように何かの外的な対象や現象が心にとどめられ、それに気づくとか、気を配るとかの意味ではなく、また世尊の教えが心にとどめられていることでもない。後者の世尊の教えに対しては第三節第一項で詳述するが、aññāya、viditvā、pajānaṃ と連続体や現在分詞の形で世尊の教えを「知って」や「了解して」、「よく理解しつつ」などと表現されていることから、sata は世尊の教えを対象としているわけではないのである。したがって、sata や sati を世尊の教えを了知した上で自らが最初に行うべき宗教上の行為であると考えれば、上で原意について述べた通りに、その意味は仏教修行者として「自己の存在が心にとどめられている」ということ、言い換えれば「自己の存在を心にとどめている」ということになるであろう。具体的にいえば、過去から現在にいたる自己がどのようなであったか、現在の自己の在り方がどうであるのか、そしてこれからどうあるべきかなど、自己をしっかりと心にとどめ、あるがままの存在に気づくといった意味を内包しているのではないかと考えられる。したがって、何をなしてきたのか、どのような立場にあるのか、何をなさねばならないのかなどさまざまな視点から自己の在り方を弁え、絶えず悟りを求めて自己を内観するという意義を有する sata や sati を「自己がいかなる存在であるのかを正しく心にとどめる」や「自己の存在を正しく自覚する」と理解するのが適切ではないかと考える⁽⁸⁾。荒牧訳が「あるがままにいまこの存在を自覚する」と訳出した根拠は不明であるが、上記の資料やこうした考察から判断すれば適切な訳といえる。

このように sata、sati の原意は、正しく心にとどめ、正しく自覚する対象が「自己の存在」であると解釈したわけであるが、そのことは以下で論じる sata や sati のさまざまな用例からも適切であると知ることができ、また別稿で論じる⁽⁹⁾が、最古層經典から古層へと展開する過程において sati という語で心にとどめる対象が身体やブツダなどへと展開することを考慮に入れると、最古層經典ではその対象が「自己の存在」であると理解するのは論理的に妥当性がある。

この理解に基づき、筆者は以下において過去受動分詞 sata を「〔自己の存在を〕正しく自

覚している」と、名詞 sati を「〔自己の存在を〕正しく自覚すること」と訳すこととするが、この訳が適切であるのかどうかを含めて、これ以降もさまざまな考察を通して検証していきたい。

第二節 最古層經典にみる sata、sati の用例

これより、『スッタニパータ』第四章・第五章という最古層經典に説かれる sata、sati (satimant を含む) の用例を眺め、その用法を考察する。

第一項 最古層經典『スッタニパータ』第四章の用例

まずは、第四章「アッタカ・ヴァッガ」に説かれる sata および satimant の偈を文脈上より眺め、その教えの構造を簡潔にまとめる。そこから、最古層における sata、satimant の意義を考えてみたい。具体的には、それが何を前提にして実践され、それを基にしてどのような修行が日々行われ、いかなる結果にいたると説かれているのか、その構図を抽出する。尚、sata や satimant の前提条件を〈 〉、続いて行う実践内容を【 】、そして導かれる結果を《 》で表記するものとする

・絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚して (sato) → 《等しいとか、優れているとか、劣っているとか思わない》(855)

・絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚して (sato) → 【学修する】 → 《渴愛を取り去る》(916)

・〈この教えをよく知って、熟慮しつつ〉 → 絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚して (sato) → 【学修する】(933)

・〈言葉で〔注意を〕促され〉 → 〔自己の存在を〕正しく自覚して (satimā) → 喜ぶとよい(973)

・〔自己の存在を〕正しく自覚して (satimā) → 【学修する】 → 《塵垢を取り去る》(974)

・〔自己の存在を〕正しく自覚して (satimā) → 《心をすっかり解き放ち、〔五つの塵垢に対する〕興味をなくすがよい》(975)

などがみられ、その他にも世尊のことばとは記されていないが、

・〔自己の存在を〕正しく自覚して (sato) → 《この世に〔存在するものに〕対する執着を越える》(768)

・絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚して (sato) → 《欲望の対象を避ける》(771)

また、世尊ではなく直弟子サーリプッタのことばもみられる。

・〈心をつつにして、賢明で〉 → 〔自己の存在を〕正しく自覚して (sato) → 《自らの垢を吹き消す》(962)

それでは、ここで以上の偈にみられる sata、satimant の前提条件と、続く日々の修行、導

かれる結果がどのように説かれているのかをまとめてみる。

〈前提条件〉：この教えをよく知って、熟慮しつつ (933)、心をつにして、賢明で (962)、言葉で〔注意を〕促され (973)

【続いて行う修行】：学修する (916、933、974)

《導かれる結果》：この世〔に存在するもの〕に対する執着を越える (768)、欲望の対象を避ける (771)、等しいとか、優れているとか、劣っているとか思わない (855)、渴愛を取り去る (916)、自らの垢を吹き消す (962)、塵垢を取り去る (974)、心をすっかり解き放ち、〔五つの塵垢に対する〕興味をなくすがよい (975)

第二項 最古層經典『スッタニパータ』第五章の用例

第五章は章名が「パーラーヤナ (彼岸に至る道)」であるだけに、苦しみを脱する道がテーマとなっており、仏教最古の修行過程を知るには最もふさわしい。既に第五章における修行過程を精査し、中でも sata、sati の用法は特筆すべきであり、当時の仏教において修行の第一歩であり、根幹とも位置づけられた極めて重要な意義を有したものであると指摘した⁽¹⁰⁾。

ここでは、第四章と同様にして第五章にみられる sata、sati (satimant を含む) の用例と修行過程のパターンを中心にみていく。

- ・〔自己の存在を〕正しく自覚すること (sati) → 《流れを阻止する》
智慧 → 《流れを塞ぎ止める》 (1035)
- ・〈すべての存在〔の意義〕をよく熟知して〉 → 〔自己の存在を〕正しく自覚していて (sato) → 【遊行し続けていく】 (1039)
- ・清らかな行い、渴愛を離れ、絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚していて (sato)、〔教えを〕深く考究して → 《涅槃した》 (1041)
- ・〈〔この世において、激流、生まれと老い、憂いと悲しみを乗り越える〕教えを知って〉 → 〔自己の存在を〕正しく自覚していて (sato) → 【修行し続けていれば】 → 《執着を乗り越えられる》 (1053)
- ・〔自己の存在を〕正しく自覚していて (sato) → 【修行しながら、我がものというところを捨て】 → 《生まれや老いや憂いや悲しみ〔という苦しみ〕を捨てる》 (1056)
- ・賢明でいて、〔自己の存在を〕正しく自覚していて (sato)、〔私の〕声を聞いたならば → 【学修する】 → 《涅槃を〔体得〕》 (1062)
- ・〈寂靜〔の教え〕を知って〉 → 〔自己の存在を〕正しく自覚していて (sato) → 【修行し続けていれば】 → 《執着を乗り越えられる》 (1066)
- ・〈何もないと観察し〉 → 〔自己の存在を〕正しく自覚していて (satimā) → 【〔何も〕存在していないと〔の境地〕に立って】 → 《激流を渡れ》 (1070)
- ・〈〔興味と貪りを取り除くことこそが不減なる涅槃の境地である〕ことをよく知って〉 → 〔自

己の存在を〕正しく自覚していて（satā）→《涅槃して、絶えず寂靜で、執着を乗り越えている》（1087）

- ・〈〔比類なき避難所である涅槃では、老いと死神は滅してしまっている〕ことをよく知って〕→〔自己の存在を〕正しく自覚していて（satā）→《涅槃した》（1095）
- ・〈〔執着するから死の魔王が人に付きまとうことを〕了知しつつ〕→〔自己の存在を〕正しく自覚していて（sato）→《いかなるものにも執着しない》（1104）
- ・〈教えに対する〔深い〕思索〕→平靜な心と〔自己の存在に対する〕正しい自覚（sati）によって清浄となる〕→《解脱》（1107）
- ・感覚に喜ばず→〔自己の存在を〕正しく自覚していて（satassa）→【修行し続けていれば】⇒《識別作用は減する》（1111）
- ・絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚していて（sato）→【我〔は実在すると〕いった誤った見解を断って、空と觀察】→《死神を乗り越えられる》（1119）

それでは、ここで以上の偈にみられる sata、sati の前提条件と、続いて行う日々の修行、導かれる結果がどのように説かれているのかを別々にまとめてみる。

〈前提条件〉：〔激流、生まれと老い、憂いと悲しみを乗り越える〕教えを知って（1053）、寂靜〔の教え〕を知って（1066）、何もないと觀察し（1070）、〔興味と貪りを取り除くことこそが不減なる涅槃の境地である〕ことをよく知って（1087）、この〔比類なき避難所である涅槃では、老いと死神は滅してしまっている〕ことをよく知って（1095）、〔執着するから死の魔王が人につきまとうことを〕了知しつつ（1104）、教えに対する〔深い〕思索（1107）

こうした前提条件は、「涅槃、寂靜などの教えを知って」などの用例から判断して、主にゴータマ・ブッダの悟った境地が説かれている。これはその教えを聞いた直弟子の目ざすべき境地でもあるが、ここにはそのことをまずは正しく了知してからであるということがよく示されている。他にも、次のような表現もみられる。

〔この世の〕すべての存在の〔意義を〕よく熟知して（1039）、清らかな行い（1041）、渴愛を離れ（1041）、何もないと觀察しながら（1070）、感覚に喜ばず（1111）

【続いて行う修行】：遊行し続けていく（1039）、修行し続けていれば（1053、1066、1111）、修行しながら我がものというとらわれを捨て（1056）、学修する（1062）、〔何も〕存在していないと〔の境地〕に立って（1070）、我〔は実在すると〕いった誤った見解を断って、空であると觀察（1119）

これらの用例で気づく点は、「学修する」と「修行すれば」がほとんどを占めていることである。その他では、「遊行し続けていくべき」、「空であると觀察」などである。

《導かれる結果》：流れを阻止する（1035）、涅槃した（1041、1095）、執着を乗り越える（1053）、生まれや老いや憂いや悲しみ〔という苦しみ〕を捨てる（1056）、涅槃を〔体得〕

(1062)、執着を乗り越える (1066)、激流を渡る (1070)、涅槃し絶えず寂靜で執着を乗り越える (1087)、執着しない (1104)、解脱 (1107)、意識作用は減する (1111)、死神を乗り越える (1119)

これらの用例を簡潔に分類してまとめると、涅槃や解脱の表現、「執着を乗り越える」といった苦しみの原因を乗り越える表現、その他では「死の魔王を見ない」、「生まれや老いや憂いや悲しみの苦しみを捨てる」、「意識作用は減する」などがみられる。この《導かれる結果》は悟りの境地とみなしてよいが、この世〔に存在するもの〕に対する執着を越える、欲望の渴愛を取り去る、自らの垢を吹き消す、我がものというとらわれを捨て生まれや老いや憂いや悲しみという苦しみを捨てる、この世で涅槃し絶えず寂靜で執着を乗り越える、などと具体的に表現されている。

以上、最古層經典では sata や sati 、とりわけ sata は修行過程における根幹として説かれているのがよくわかる。sati が名詞で修行の概念を示すのに対して、sata は過去受動分詞で現に存在する仏教修行者の在るべき性質や状態を表現するために用いられたのであろうが、sata の用例の際立った多さは仏教最古の時代に真摯に自己を見つめ彼岸を求めて生き抜いた修行者の生き生きとした状況をよく表しているのかもしれない。いずれにしても、仏教最古の根本的立場が何であったのかを知るには、sata、sati の意義を詳察することが必須となろう。そうすれば、おそらく興起した時代の根本的立場の断面が顕わになるはずである。

第三節 最古層經典にみる sata の用法

このように、sata はゴータマ・ブッダや直弟子たちの時代における修行を解き明かす重要な意義をもつ用語であることが明白となった。これより、sata の用法について次の三点より考察する。

第一項 「教えを了知して」とそれに続く sata

前節で述べたように、第五章には修行の過程を「教えを了知→〔自己の存在を〕正しく自覚→修行→涅槃などの悟りを体得」と説く偈 (1053、1066) やそれに類似した偈 (1041、1062) もみられるが、そこには修行はまず教えを了知することから始まると説いている。その「教え」の内容を想定できる偈は第四章も入れると六例ほど (933、1053、1066、1087、1095、1104) みられるが、具体的な内容が想定できない「声を聞いて」や「教え」というだけの表現例 (1062、1107) もある。こうした修行の過程を説く偈の多くで、sata は「教えを了知して」を前提とした上で行うべき実践として説かれている。

そこで、sata の用法を知る上でも「教えを了知して」というフレーズの「教え」が何を指しているのかを考える必要がある。そこには真理を体得した世尊の教えが説かれているからである。第五章における世尊の説示は、形式的にはバラモンの若き学生の問いに対する返答にな

ってはいえるものの、実際には自らと同じ道を歩むもうとしている直弟子たちに説いた世尊のことばなのである。

上記の1053偈などの六偈には世尊の教えがその偈の中で説かれていない場合でも、教えが何を指しているのかはバラモンの若き学生が質問した内容からや文脈などから想定できるものもある。その教えの内容は、次のごとくである。尚、想定した教えは〔 〕で示す。

「〔戒と三昧〕」、「寂靜であることこそが涅槃」(933)

「〔この世において激流、生まれと老い、憂いと悲しみを乗り越えること〕」(1053)

「寂靜」(1066)

「〔興味と貪りを取り除くことこそが不滅なる涅槃の境地であること〕」(1087)

「〔比類なき避難所である涅槃では老いの苦しみと死神は滅してしまっていること〕」(1095)

「〔執着するから死の魔王が人に付きまとうこと〕」(1104)

これらの教えの内容は、苦しみとその原因でもある執着からの脱却や目ざすべき寂靜なる涅槃の境地となっており、どこにも論理的な思考に基づいた思想や教理に関する内容は説かれていない。

ここで、「教えを了知して」の「了知して」という原語についてもみておこう。933偈と1087偈と1095偈では aññāya (\bar{a} $\sqrt{j}\bar{n}\bar{a}$ の連続体)、1053偈と1066偈では viditvā (\sqrt{v} id の連続体)、1104偈では pajānaṃ (pra $\sqrt{j}\bar{n}\bar{a}$ の現在分詞) が用いられており、二種の語根で表現されていることがわかる。それらには微妙な相違はあるかもしれないが、いずれも世尊の教えを「了知する」や「よく理解する」などを意味していることにはちがいない。

世尊の教えを聞き、それを契機として sata を実践すると説いているのは、これらの偈以外にも、1062偈、1107偈にみられる。世尊が教えを説くとき「〔私の〕声を聞いたならば (suttvāna nigghosaṃ)」(1062) という表現からもわかるように、そこには教えを説く世尊と真理を求めて一言も漏らさず聞き取ろうとする直弟子たちの緊張感ある宗教的世界が見て取れる。その内容を正しく理解した直弟子たちは、教えを正しく理解するだけではなく、それを契機として自らも世尊と同様にして修行を体験するのである。この関係性こそが、仏教が成立したときの根本的な構図といってよいであろう⁽¹¹⁾。それが「教えを了知して」→「〔自己の存在を〕正しく自覚する」において説示されている意義と考えられる⁽¹²⁾。この文脈は、真摯に悟りを求めようとした直弟子が真理を体得したゴータマ・ブッダの教えをよく理解して、師と同様の境地に至ろうと修行に励んでいた当時の状況を見事に映し出しているようである。

こうした考察は、一方でゴータマ・ブッダの修行をも予測させてくれる。それは、後代の伝承によるものではなく、今まで知りえなかったゴータマ・ブッダの修行の歴史的事実を知ることのできる可能性を示してくれているのである。ゴータマ・ブッダは独自に修行を完成させ悟りを体得したのであるから、誰か他の宗教者によって教え導かれたわけではなかった。そこから推察すると、ゴータマ・ブッダの修行には直弟子に説いた「教えを了知して」という過程は

なかったことになり、結局のところ彼の修行は sata の実践から始められたのではないかという結論にいたる。直弟子に説いた修行法は、実はゴータマ・ブッダ自身の修行を披瀝しているのである。このように考えると、ゴータマ・ブッダや直弟子にとって sata が自らの修行の第一歩であり根幹であったといえよう。

第二項 「絶えず (sadā)」を伴う sata

sata には、ある一定の期間ではなく持続を意味する副詞 sadā「絶えず」によって修飾された用例が多く見受けられる。この用法は、他にも「絶えず〔世尊を〕敬いながら学修する」とよい (sadā namassam anusikkhe) (934) や「〔この世で〕涅槃した人々は、絶えず寂静であつて (upasantā ca te sadā) (1087) のように用いられてはいるが、最古層經典で sadā が用いられている八例中の六例 (771、855、916、933、1041、1119) まだが sata との対であり、これは顕著な用例であるといえる。したがって、sata の意義を探るためには sadā の意味も考慮に入れて考える必要がある。

sadā が sata に用いられているのは、自己の存在を自覚することが絶え間なく続けるべき行為であり、自己を徹底的に見つめ、克己し続ける極めて厳格な行為であることを示しているからなのかもしれない。そのことは同時に、sata が日々のあらゆる修行の基礎となる行為であることを示しているのであろう。一定期間に限定されることなく継続して sata を実践することと、絶えず日常的に正しい行為を続ける「修行する (√car)」こととが関連性をもつことは当然である。このことは、「修行する」という動詞が「その教えを知って、〔自己の存在を〕正しく自覚していて、修行し続けていれば、この世〔に存在するもの〕への執着を乗り越えられよう (yaṃ veditvā sato caram, tare loke visattikaṃ) (1053、cf.1056、1066) などの用例のように現在分詞形で説かれていることとも関連しているようである。このように、sadā の意義は仏教修行者にとって、たとえ初心者であろうとも深まった境地にいる者であろうとも、自己の存在を自覚することが修行のあらゆる過程において不可欠であることを示しており、一瞬たりとも疎かにしない当時の仏教修行者の厳しい生活を窺わせる。いずれにせよ、sata が sadā という持続性を有する語で表現されていることは、sata があらゆる修行を通じて一貫して行うべき重要な実践法であることを物語っているのである。

第三項 sata と √car、√sikṣ にみる修行

sata の実践と共に行われる修行内容は、「修行する」(√car「歩む、実行する」) や「学修する」(√sikṣ「習得する、学ぶ」) などと一般的な動詞で表現されているため、それらの具体的な内容がわからない。

そこで、最古層經典に「修行」がどのように説かれているのかを考察する。第五章に、仏教修行者はどうあるべきか、何をなすべきかという表現例を取り上げ、「修行」の内容を想定し

てみる。

「欲望の対象の中にあつて清らかな行いを続け、渴愛を離れ」(1041)、「何かよく知るものがあるとしても、それらに対する喜びと入れ込みと識別作用を排除して」(1055)、「この世において賢明でいて」(1062)、「[教えの中でも] 最もすぐれた教えをよく知って」(1064)、「渴愛をなしてはならない」(1068)、「[この世には] 何もないと観察し」(1070)、「欲望の対象を捨てて、論議することから離れて、渴愛の減尽を昼夜に見つめよ」(1070)、「すべての欲望の対象に対する貪りを離れ、何もない[という境地] に立って」(1072)、「渴愛を知り尽くして」(1082)、「この世における好ましいものに対する興味と貪りを取り除くこと」(1086)、「さまざまな欲望の対象に対する貪りを取り去りなさい。[欲望の対象に対する貪りから] 出離[した生活] を安穩であるからと考えて」(1098)、「過去に存在した[欲望の対象に対する貪りなど] を干渉びさせよ。未来に[存在するであろう] いかなる[欲望の対象に対する貪りなど] もあなたにはあつてはならない。現在において、[何にも] 執着しない」(1099)、「すべてのこの世に存在するいかなるものにも執着しない」(1104)、「欲望の対象に対する興味を捨て、憂いと沈鬱な心の両方を取り除き、後悔しないようにすること」(1106)、「それぞれの感覚にいちいち喜ばず」(1111)、「この世[に存在するもの] は空であると観察しなさい」(1119)、「我[は実在するという] ことに基づいた誤った見解を断って」(1119)、「勝手気ままな[生活を送る] ことなく、[身体の] 物質的要素[へのとらわれ] を捨て」(1121)、「勝手気ままな[生活を送る] ことなく、渴愛を捨て」(1123)

こうした内容から、どういった修行に励んでいたかはおよそ知ることができるが、これだけでは不十分である。ここでは取り上げないが、「修行する (√car)」と同様に用いられている「学修する」の名詞形 *sikkhā* の規定が最古層の第四章第一五經 (941-954偈) に説かれているので、それらから考察する必要がある。そこに示される「学修 (*sikkhā*)」は、後に律蔵で仏教修行者が学ぶべき依りどころや諸規定を「学処 (*sikkhāpada*)」といわれることや、また比較的新しい韻文經典に説かれる「三学」という用語の「学」の原語が *sikkhā* であることから、後には学処や三学の内容に対応するのであろう⁽¹³⁾。また、その他にも第四章第一四經には世尊が説いた戒 (*pātimokkha*) と三昧 (*samādhi*) の内容 (922-932偈) が挙げられており、それも修行の具体的な内容を探る用例となろう。

ここで、*sata* に話を戻してみる。上記の修行内容のほとんどがいわゆる戒に関する内容であり、精神的修行と考えられる *sata* とは直接的には関連しないようであるが、戒と三昧の教えを列挙した直後に「仏教修行者は、こうした[戒と三昧の] 教えをよく知って、熟慮しつつ、絶えず[自己の存在を] 正しく自覚していて、学修するのがよい (*etañ ca dhammam aññāya, vicinaṃ bhikkhu sadā sato sikkhe*)」(933ab) と説かれていることから、*sata* は日々の修行や学修を实践するあらゆる状況にあつて絶えず自己の存在を正しく自覚する精神的修行であることがよくわかる。この点は、上記の第二項でも述べた通りである。

第四節 sata、sati と他の精神的修行

これより、最古層經典において精神的修行がどのように説かれているのかを、sata および sati と他の精神的修行とを比較しつつ考察する。

第一項 sata、sati とさまざまな精神的修行

最古層經典に説かれる精神的な修行法やあるべき精神的状態を示す語句は sata や sati (satimant を含む) が最も多いが、中でも sata が際立っている。その他の用語をみると、「平静さ (upa √īkṣ 「黙視する、注視する」)」に関しては upekhaka (855、972)、upekhā (1107)、「瞑想 (√dhyai 「思いに耽る、瞑想する」)」に関しては jhāyin (925、1105)、jhānānuyutta (972)、また「安定した、心を一つにして (sam-ā √dhā 「置く、集中する」)」を意味する用語として samāhita (972)、ekodi (962)、ekodibhūta (975)、「心の平穩」に関しては santa (783)、upasama (919) や、その他「思惟する、熟考する」に関する表現では vicinaṃ (933)、parivīmaṃsamāno (975)、saṃkhāya (1041) や、「観察する」に関しては ākiñcaññaṃ pekkhamāno (1070) などの例がみられる。

それでは、これより sata や sati の意義を他の精神的修行法との比較から考察する。ごく僅かではあるが、sata や sati と同一の偈に相並んで説かれている用語がある。まず「平静さ (upekhā、upekhaka)」に関してみると、この用例は「平静でいて、絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚している (upekhako sadā sato) ので、この世〔に存在する〕人と比べて等しいと思わないし、自分が優れているとか、劣っていると思わない」(855) や「平静さと〔自己の存在に対する〕正しい自覚によって清浄となることである (upekhāsatisaṃsuddham)」(1107) の偈にみられる。特に留意しておかなければならないのは、upekhaka (upekhā) が sata、sati と一対をなして用いられているという点である。upekhaka (upekhā) は語根「黙視する」より派生した名詞で、無関心などとも訳せ、外界に惑わされることのない心の平静な状態を示すのに対して、sata、sati は自己の存在を正しく自覚するというように自己の心の内を洞察することから、両者はある意味対照的な用法ではないかと考えられる。少なくとも、sata、sati は upekhaka (upekhā) とは異なった意味で用いられていることだけは確かである。

また、同様に「心を一つにして」と集中を意味する表現に関しては「どのような学修を身につければ、心を一つにして (ekodi)、賢明で、〔自己の存在を〕正しく自覚している者は (sato) ……自らの垢を吹き消すことができるのですか」(962) という偈にみられ、そこでは sata と ekodi の両語が併記されているので、sata は ekodi のような心を一つに集中する意義を含んでいなかったものと理解できる。

こうした用例の他にも、sata や sati と同一の偈で並んで説かれる語句に「熟慮して (vicinaṃ)」(933)、「心をすっかり解き放ち (suvimuttacitto)」(975)、「あらゆる存在の〔意義

を〕熟知して (kusalo sabbadhammāṇaṃ)」(1039)、「深く考究して (saṃkhāya)」(1041) などがみられるが、「熟慮して」や「深く考究して」の他は sata や sati の意義を知るための十分な資料とはなりえない。

このように、最古層經典を通して精神性に関わる修行法をみると、sata や sati 以外では upekkhā や ekodi、samāhita などが限定的にみられにすぎず、他では「瞑想して (jhāyī)」(925) や「瞑想に専念し (jhānānuyutto)」(972)⁽¹⁴⁾を挙げることができる。総じてみれば、精神性に関わる修行法に関してはいかにも簡素であり、禪定を最重要視したといわれる仏教にとっては何か不思議な感じがしないでもない。中でも、後に精神的修行法の代表的な用語となる sam-ā √dhā や √dhyai の派生語がいまだその修行法の中心的な意義を有していなかった状況は興味深い。これらの用法に関してあえていえば、集中を意味する用語は sata や sati が自己の存在を正しく自覚する精神的な行為であるのに対して、自己の存在を正しく自覚するための姿勢や日々の修行でのあるべき理想的な姿勢・態度を示しているのであろう。因みに、最古層ではこの集中を意味する用語に、後に定着することになる samādhi は用いられていない⁽¹⁵⁾。瞑想に関しては、「眼差しを下にして、歩みに乱れはなく、瞑想に専念し」(972)といった用例から判断して、特定の精神的な在り方を示すというよりも、思いに耽る状態や形態を意味する語として用いられているのではないかと考えられる⁽¹⁶⁾。この用法は、sata および sati や、集中した状態を示す samāhita などとは異なり、そうした精神的な実践を総じて表現する用語であると解釈できよう⁽¹⁷⁾。

こうして眺めてみると、最古層經典に説かれる sata と sati は、最古の仏教における精神的な修行法の中核とも位置づけられる用語で、精神的修行において大きな意義を担っていたのではなかったかと考えられる。

第二項 sati と智慧 (paññā)

最古層經典には sata および sati と一対で説かれる用語がみられるが、そのうち「平静さ (upekkhā)」については既述したので、ここでは「智慧 (paññā)」を取り上げ sati との関係をみる。

sati が、修行に関して中核的な役割を有した用語であるのは、次の用例からも明らかである。「アジタよ、この世に〔存在する人の欲望の衝動による〕さまざまな流れを堰き止めるのは、〔自己の存在を〕正しく自覚すること (sati) である。私はこの流れの防御を説くのである。智慧 (paññā) によって、これらの流れは塞ぎ止められるのである」(1035) と、この世の欲望によるさまざまな流れを堰き止めるのは、智慧と並んで sati であると説かれている。つまり、sati は智慧と同等の働きをもつ語として説かれているのである⁽¹⁸⁾。これと同様の用例は、古層の『サンユッタ・ニカーヤ』第一章「デーヴァター・サンユッタ」の偈に「智慧は (paññā) この世に〔存在する人々に〕おける光明である。〔自己の存在に対する〕正しい自覚は

(sati) この世に〔存在する人々に〕おける覚醒 (jāgaro) である」(SN. 1-8-10) と、この世の人々にとって智慧は光明であり、sati は覚醒であると説かれ、また他にも「私の〔自己の存在に対する〕正しい自覚と智慧は (satipaṇṇā) 増大し、心はしっかりと安定している」(SN. 4-3-2-10) と、両語が一对で説かれている⁽¹⁹⁾。これらからも、sati は修行上重要な意義を有する用語であるかがよくわかる。

この二つの用語が一对で用いられている意義は、正しい自覚と智慧によってそれぞれ自己の存在とこの世の真実のあり方を洞察し正しく理解するところにあるだろうが、そういうことから考えれば、最古の仏教は論理や合理による思考作用に基づいていたのではなく、修行によって体得できる直観に基づく宗教性にその存在意義を有していたのであろう。

[注]

- (1) 原始仏教における sata、sati (satimant を含む) の研究は僅かにすぎない。藤田宏達は、sati に関して「sati (念) も禪定をあらわす語である」と指摘し、具体的には色界四禪の第三禪と第四禪や、四念処、十随念の念など比較的に後に展開した内容について述べ、最古層經典の用法については言及されていない。藤田宏達「原始仏教における禪定思想」『佐藤博士古稀記念 佛教思想論叢』山喜房仏書林 1972. 10 p. 302。

それに対して、田中教照は『スッタニパータ』の第四章・第五章に説かれる修行法を論じる中で sata、sati (念) の重要性を次のように指摘する。田中教照『初期仏教の修行道論』山喜房仏書林 1993. 2 pp. 13-42, 106。

①「『スッタニパータ』「八詩頌章」においては、諸々の欲望の流れ（具体的には、睡眠、倦怠、偽り、傲慢、二枚舌、怒り、貪欲、放逸、過度の慢心など）をせきとめる行として念（気をつけること）が説かれ、念の重要性が説かれる。そして、念を習得して、五感の対象にたいする貪りを制し、欲の制御と理法の考察と心集中をもって暗黒（無明）を打破せよ、と説く。」(p. 106)

②「『超脱章』においては、ここでも念の重要性がくりかえされているが、法にたいする知も強調され、知と念によって無所有に達すべきを説く。そして、欲望は五蓋の一部にまとめられ、また、無明が重視されてきたので、これを破ることがもっとも重要な修行となってきた。」(p. 106)

他にも幾つか指摘されているので、それらも紹介しておこう。

「『念』(sata) が修行として重要な位置をしめているのではないか、と考えられる。」(p. 17)、
「『八詩頌章』(Aṭṭhakavagga) に説かれる修行は主に否定されるべき諸点をあげてそれを止めることを主眼としている。そして、肯定的な意味では、特に、念が修行の中心におかれており、欲望を回避する方法として、念のもつ意義が重視されているといえよう。」(p. 27)、
「『気をつける』ことを、遍歴という修行者にこそ基礎的な行の条件としてすすめている。」(p. 29)、
「総勢、十六人中の十人までが釈尊から「気をつける」(念) ようにと指導されているのである。したがって、
「超脱章」(Pārāyanavagga) においては、念が修行としていっそう強調されるものであった、といえるのである。」(p. 32)、
「釈尊の実体験であり、その実体験を忘れずにいることが「気をつける」(念) の意味するところであつたろう」(p. 34)、
「何にたいして気をつけたらよいというのであろうか。……欲望に溺れないように気をつけること、生存・非生存にたいする妄執を減し世間の愛着を超える体験の法を忘れずにいること、無取著・無所有を理想として持つよう気をつけること。これらが念の対象となるところであらう。」(p. 32-35) などと指摘している。

この田中教照の研究は、原始仏教に説かれる sata、sati を正面から考察した最初といってよく、有意義である。ただ、指摘しておかなければならない問題もある。たとえば、この語を「気をつ

けて」と訳し、また漢訳の通りに「念」とするのみでは、曖昧のままに論を続けていくことになるので、語義を限定するように努めるべきであろう。また、念の対象に関しても「これを知って気をつけ」というフレーズについて「気をつける前に「よく知る」ことを強調するのである」（p. 42）と指摘するが、「これを知って」と「気をつけて」との関係性などについても厳密に考察すべきではなかったかと思われる。

近年では、林隆嗣「意識を向けていること、じゅうぶんに理解していること—パーリ仏教における念と正知—」『こども教育宝仙大学紀要』Vol. 10 2019. 3 pp. 21-31 の研究がある。意識を向けている、注意していることを意味する「念 (sati)」と、じゅうぶんに理解していることを意味する「正知 (sampajāna / sampajāñña)」という2つの概念に注目し、パーリ聖典全般から身心の苦痛を除く実践的意義や役割を考察されているので、最古層經典に絞った sata、sati の意味や用法に関しては詳細に論じられていない。

- (2) sata は 768、771、855、916、933、962、1039、1041、1053、1054、1056、1062、1066、1067、1085、1087、1095、1104、1110、1111、1119、sati は 1035、1036、1107、satimant は 973、974、975、1070 の各偈にみられる。
- (3) sata は 283、413、466、741、751、753、sati は 77、151、340、434、444、satimant は 45、70、88、174、212、411、503、515 の各偈にみられる。
- (4) 中村訳：中村元訳『ブッダのことば—スッタニパータ—』岩波文庫 1984. 5、ノーマン訳：K. R. Norman, *The Rhinoceros Horn and Other Early Buddhist Poems (Sutta Nipāta)*, PTS., London, 1985、荒牧訳：荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄訳『スッタニパータ [釈尊のことば]』講談社学術文庫 2015. 4（第一章・第四章・五章担当）、榎本訳：同書（第三章担当）、本庄訳：同書（第二章担当）、村上・及川訳：村上真完・及川真介訳『仏のことば註（三）—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社 1988. 1、『仏のことば註（四）—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社 1989. 10、田中訳：田中教照 前掲書 pp. 9-67 所収、宮坂訳：宮坂宥勝訳『ブッダの教え スッタニパータ』法蔵館 2002. 10、石飛訳：石飛道子訳『『スッタニパータ』と大乘への道 ブッダの教えはどのように大乘仏教に引き継がれたのか？』株式会社サンガ 2016. 5（第四章のみの翻訳）。
- (5) 他に、田中訳は sati「念」（1107）、satimant「念ある者」（973、974、1070）など、村上・及川訳は sati「記憶（念）」（1107）、satimant「念をこめて」（973、974）、「思念」（1070）など、宮坂訳は sati「正しい想念」（974、975、1070、1107）、satimant「想いをこめて（＝感謝して）」（973）などとしている。因みに、古層經典の『スッタニパータ』第二章では sati を本庄訳は「注意を」（340）、ノーマン訳「be mindful」（340）、同第三章では sati を榎本訳は「何事にもよく気をつけて」（444）、ノーマン訳は「(making) my mindfulness, well-established」（444）、satimant を榎本訳は「何事にもよく気をつけて」（503）、ノーマン訳は「possesses mindfulness」（503）とする。
- (6) ここで、第四章「アッタカ・ヴァッガ」の漢訳とされる支謙訳『佛說義足經』（大正藏第四卷）において sata や satimant がどのように漢訳されているのかをみておきたい。sata (smṛta)：768偈「定行禪 (p. 175c)」、771偈「攝意 (p. 175c)」、916偈「覺識 (p. 184b)」、933偈「著意? (p. 184c)」、962偈「獨在行常無伴? (p. 186b)」、964偈「至心學 (p. 186c)」、855偈「止意念 (p. 187c)」、satimant (smṛtimat)：973偈「莫增意? (p. 186c)」、974偈「有行意 (p. 186c)」、975偈「制意 (p. 186c)」となる。このうち、962偈は原典に相違があるように思われるが、sata の箇所に対応する漢訳を記しておく。また、973偈では satimābhinande に対する漢訳で、satimā 単独では訳されていないようであり、974偈も原典に相違があるのではないかと思われる。『義足經』に関しては、南清隆「『義足經』と Aṭṭhakavagga —因縁譚の対照を中心に—」『佛教史学研究』29-1 1986. 7 pp. 1-16、加治洋一・漢訳仏典研究会編『『義足經』研究の視座 附・訓読』光華選書 7 2019. 3 pp. 9-148 を参照。

その他の漢訳語では、『雜阿含經』に sata：「正念」（大正藏第二卷 p. 156a）、「繫念」（同 p.

- 285c)、「堅固？」(同 p. 352b)、sati:「心意」(同 p. 11c)、「念力」(同 p. 477a) などがみられる。
- (7) 他にも、「言葉で〔注意を〕促された時、〔自己の存在を〕正しく自覚できる (satimā) と喜ぶがよい」(Sn. 973a) とあるが、ここには自分自身では気づかなかったことを他人から指摘を受け、その指摘されたことに気づくという意味だけではなく、そのことを契機に自分がいま置かれている現実が何であるかをしっかりと自覚できるのであるから喜ぶべきことであると、説いているように解釈できよう。
- また、「私は死ぬことを喜ばない。私は生きていることを喜ばない。私は〔そのことを〕了知して、〔自己の存在を〕自覚して (patissato)、死の時を待つ」(Th. 196、607、cf. 1002)、「履物をはかずに棘のあるところを〔歩く時は、自己の存在を〕正しく自覚して (sati) 歩むように、そのようにして沈黙の聖者は村を歩むとよい」(Th. 946) などとも原意を知る資料になろうか。他にも、Th. 31、244 (=684)、443、457、518、519、636 には sata の語形で、また Th. 260、317 には satimant で同様の用法がみられるであろう。
- (8) 因みに、「careyya ten' attamano satimā」(Sn. 45d) のパラレルである Udānavarga 14. 13d には「careta tenāptamanā smṛtātma」¹⁾と、また「samāhitaṃ jhānarataṃ satimaṃ」(Sn. 212b) のパラレルである Udānavarga 12. 19b には「samāhito dhyānarataḥ smṛtātma」などと、satimant がサンスクリットでは smṛtātman と bahuvrihi の複合詞になっている。satimant は「想いをこめて」や「気をつけていて」、「注意深い」などと訳されるが、smṛtātman は厳密に読めば「自己を心にとどめた人」や「自己を正しく自覚した人」と訳せるであろう。このように、sata と同じ √smṛ の派生語である satimant が『ウダーナ・ヴァルガ』のパラレルでは自己が心にとどめる対象であると読める用例となっている。ただ、Dhp. 350b の sato は、パラレルの Uv. 3-2b では smṛtaḥ と共に同じ過去受動分詞となっている。
- (9) 並川孝儀「最古層經典にみる sata、sati の意義とその展開—仏教最古の根本的立場—」『佛教大学 仏教学部論集』第26号 2021. 3 (予定) 第二節第二項「心にとどめる対象の展開—「自己の存在」から「身体」へ「仏」へ」を参照されたい。
- (10) 並川孝儀「『スッタニパータ』第五章「パーラーヤナ・ヴァッガ」にみる世尊の説示に関する基礎的研究」『佛教大学 仏教学部論集』第104号 2020. 3 pp. 1-16参照されたい。
- (11) ゴータマ・ブッダが体得した四諦の観察を仏弟子も同様に追体験しようと修行しつつも、次第にそれがいかに困難であるかという状況が、『テーラ・ガーター』にターラプタ長老の切実な声として説かれている。「何時になったら、偉大なる仙人 (釈尊) が了知した観察し難い四つの真理 (四諦) に、私は自らの心を安定させ〔自己の存在を〕正しく自覚して (satimā)、智慧によって近づいていくのであろうか。その〔私の思い〕は、何時になったら実現するのであろうか」(1098)
- (12) 田中教照が、欲望に溺れないように気をつけること、生存・非生存にたいする妄執を減し世間の愛着を超える体験の法を忘れずにいること、無取著・無所有を理想として持つこと、これらが念の対象となると指摘されていると既に紹介した (注1)) が、そうした解釈は「これを知って気をつけ」というフレーズの「これを知って」と「気をつけ」との対象を同じものと理解していることによるのであろう。そうならば、「これを知って」の「これ」を指す世尊の「教え」が説かれない用例の場合は、sata は具体的に何を対象としているのかという疑問が残る。sata の用法は、そのすべての用例に共通した意味で用いられているはずで、その用法に統一性が求められる。田中教照がこうして「気づく」対象を釈尊の実体験や「教え」などと解釈するならば、「教えを了知して」の「了知して (aññāya、viditvā、pajānaṃ)」という用語と sata とがどう関連しているのかについても考察しておく必要があるだろう。
- (13) Thi. 4、SN. XXII-76-12 など。
- (14) 因みに、jhāyati は「彼は〔欲情の〕想いにとらわれていて、〔まるで〕困窮者が思い悩んでいるかのようなのである (kapaṇo viya jhāyati)」(818b) と、最古層の經典では困窮者の思い悩むさまを示す意味でも用いられており、当時は必ずしも宗教性だけを示していたわけではなかったのだ

ある。

- (15) たしかに、samādhi は最古層經典の『スッタニパータ』第四章に一例（921）みられるが、これは質問者の言葉にみられるもので、最古層の時代には使われていなかった可能性は大きい。古くは ekodi や samāhita などが「集中」や「心の安定した」状態を意味する用語として使用されていたと考えられる。
- (16) この用法は、後に成立した韻文經典『テーラ・ガーター』に「山の裂け目におもむいて瞑想する」（41）、「森の木の密集したところで瞑想する」（466）、「川岸に坐って瞑想する」（523）などがみられる。他にも、522、524、597、864、1059-1061、1136偈や、『テーリー・ガーター』24、362偈などにみられる。
- (17) 藤田宏達は「jhāna と samādhi は、それぞれ語源的意味を異にしているが、しかし原始經典では、両者を同じような意味に用い、特に区別している形跡はない」と指摘し、「このような用法は、恐らく当時一般にこの二つの語が、特に区別されずに禪定をあらわす語として用いられていたことによるのであろう。バラモン教文献で、dhyāna と samādhi が瞑想・精神統一の意味で明確に用いられるのは、中期ないし後期の古ウパニシャッドや叙事詩においてであるが、しかし dhyāna（および dhyāyati）は、恐らく「瞑想」に近い意味で、すでに『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』に用いられ、また samādhi と同語根の samāhita も恐らく「心を統一したもの」という意味で、『ブルハド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』の中に用いられている。他方、原始ジャイナ教文献を見ても、jhāna（＝ dhyāna）と samāhi（＝ samādhi）が、ともに瞑想・精神統一の意味で用いられているから、仏教興起時代には、この二つの語は一般に禪定をあらわす語として広く用いられたものであり、仏教はそれを受けたものと見るのできるのである」（pp. 298-9）と論じる。藤田宏達 前掲書 pp. 297-315。
- (18) 最古層經典の Sn. 969偈では「智慧を何よりも重んじて（paññaṃ purakhatvā）」と、智慧の最重要性が説かれている。
- (19) 因みに、比較的新しい層に属する Th. 46、165、865などにもみられる。ただ、Dhp. 372では pañña は sati ではなく jhāna と一対となっている。この相違は禪定に関する用語の変遷と関係しているのであろうか。

〔付記〕

本稿の続篇「最古層經典にみる sata、sati の意義とその展開—仏教最古の根本的立場—」
『佛教大学 仏教学会紀要』第26号 2021. 3（予定）も参照されたい。

（なみかわ たかよし 佛教大学名誉教授）

2020年10月20日受領